

惠泉女学園大学における私費留学生の
日本語力の推移と課題
—『J-CAT』の結果より—

志 賀 里 美

A Study on Changes in Japanese Language Proficiency
and Issues of Privately Funded International Students
at Universities

—From the result of “J-CAT”—

Satomi Shiga

要旨

惠泉女学園大学で学んでいる留学生の日本語能力について、入学後に測定することは今までほとんどなかった。そこで、2017年より『J-CAT』という聴解、語彙、文法、読解の能力を測定できる試験を導入し、入学時、1年春学期終了時、1年秋学期終了時、2年春学期終了時、と定点観測的に試験を受けてもらい、客観的に日本語能力が測定できるようにした。本稿は、現3年生と現4年生の試験結果から日本語能力の推移を分析し、授業で伸ばそうとしている能力とも比較することにより、現行のシラバスの再検討をするとともに、新たな学びの可能性を探ることを目的にした。その結果、特に「読解」の点数に伸びが見られず、読解授業のあり方の見直しが必要であることが判明した。また、「語彙」についてもあまり伸びが見られなかった。「語彙」は現在の授業では付随的にしか扱えていないため、何らかの形で展開していく必要性が判明した。しかし、大学の授業は限られた時間しかないことから、すべてを授業内で補完するのではなく、自律学習と結び付けシラバスを作成する必要についても示唆をした。

キーワード：日本語力、『J-CAT』、読解、語彙、文法

Key words : Japanese ability, “J-CAT”, Reading comprehension, vocabulary, grammar

1. はじめに

2021年10月現在、恵泉女学園大学には5か国から56名（表1参照）の私費の留学生が来て学んでいるが、なかなか入学後の学生の日本語力の向上を測定することができていない。また、学生の多様化とともに、日本語の授業の多様化が望まれるが、恵泉女学園大学の日本語授業はここ数年大きなカリキュラム変更を行わず、毎年ほぼ同じ内容の授業を実施している。

そこで、本稿では『J-CAT』という日本語能力を測る試験の結果から、現在の3、4年生の日本語能力の推移を分析し、現行のシラバスの検討、および新たな学びの可能性を探りたい。

表1 恵泉女学園大学の私費留学生数と出身国（および国籍）

学年	学生数	出身国（および国籍）	学生数
1年生	16名	中国	42名
2年生	11名	ベトナム	9名
3年生	17名（18名 ¹ ）	韓国	3名
4年生	11名	フランス	1名
合計	55名（56名）	マレーシア	1名

今回の調査対象は、表1網掛け部分の3年生17名、4年生11名の合計28名である。大学の受験資格は日本語能力試験（Japanese-Language Proficiency Test 以下「JLPT」とする）N2、もしくは、日本留学試験240点相当となっており、いずれの学生もそのどちらかの能力を持っている。

なお、調査対象の人数が少なく、対象者が在生学生ということから、対象学生の全ての点数を提示することは今回避けたい。また、国籍からの分析も同様の理由より行わないことにする。

2. 現行の日本語全体シラバス

恵泉女学園大学では、留学生は1、2年次に日本語の授業を必修とし、「読む」「聞く」「書く」「話す」の4技能についてのアカデミックスキル養成を行い、大学での授業についていけるようにしている。表2に1、2年次の授

業全体を示す。

表2 恵泉女学園大学における日本語全体シラバス

		月	木
1年	春 日本語Ⅰ	【書く】正確な日本語で400字程度のまとまった文章が書けるようになる ①『大学・大学院留学生の日本語②作文編』 ②漢字・文法テスト(月曜日) ([大学・大学院 留学生の日本語⑤漢字・語彙編] L1~L10) ③まとめ練習 『アカデミック・ライティングのためのパラフレーズ演習』	【聞く】大学の授業が開けるようになる ①『留学生のためのアカデミック・ジャパニーズ【中上級】』 ②(漢字・文法テスト 月曜日) ③発音『毎日練習!リズムで身につく日本語の発音』
	秋 日本語Ⅱ	【話す(敬語)】日常生活で正確に敬語が使えるようになる ①『日本語敬語トレーニング』 ②漢字・文法テスト(月曜日) ([大学・大学院 留学生の日本語⑤漢字・語彙編] L11~L20) ③発音 シャドーイング テキストの会話	【読む】大学に必要な資料が読めるようになる ①『大学・大学院留学生の日本語①読解編』 ②(漢字・文法テスト 月曜日) ③多読
2年	春 日本語Ⅲ	【話す/聞く】大学のゼミで発表・質疑応答ができるようになる ①『アカデミック・スキルを身につける 聴解・発表ワークブック』 ②漢字・文法テスト(木曜日) ([大学・大学院 留学生の日本語⑤漢字・語彙編] L21~L30) ③発音『伝わる発音が身につく!にほんご話し方トレーニング』	
	秋 日本事情	【話す(ビジネス日本語)/異文化理解】就職活動の際に必要な日本語を学ぶ・日本企業文化を知る ①『日本語で働く!ビジネス日本語30時間』 ②漢字・文法テスト(木曜日) ([大学・大学院 留学生の日本語⑤漢字・語彙編] L31~L40) ③発音 シャドーイング テキストの会話	

1、2年生ともに各学期に週2コマ(1コマ:90分授業)、1週間に合計180分の日本語授業を15週(合計30コマ)受けている。

1年春学期の「日本語Ⅰ」では、主に「書く」「聞く」を中心に、大学入学後のレポート作成、授業聴講に支障がないように組んでいる。

1年秋学期の「日本語Ⅱ」では、「話す」「読む」の能力を向上させ、基本的な話し方やメールの書き方、そして、文献講読ができることを目的としている。また、様々な読みの能力を身につけるべく、「多読」も実施している。

2年春学期の「日本語Ⅲ」では、ゼミでの発表を視野に入れ、「話す」「聞く」ための授業を行い、その集大成として学内で「スピーチ大会」も実施している。

2年秋学期の「日本事情」では、就職支援に向け、ビジネス日本語の実践と異文化理解をテーマにし、学習している。本学では3、4年次には日本語の授業がなくなるため、就職活動の際に困るといった声を耳にしたため、就職の際に応用できる能力を養うことを目的とした。授業内では、実際に「外

国人雇用センター」の方に来ていただき、日本での就職活動や就職状況などもお話しいただき、動機付けも実施している。

全クラスに共通することは、発音指導と漢字習得のための漢字試験を設けている点である。恵泉には中国人留学生も多くいるが、近年ベトナムの留学生が増えており、非漢字圏の学習者が大学で学ぶ際に漢字の習得については問題となっている。そこで、『大学・大学院 留学生の日本語⑤漢字・語彙編』を2年間で1冊分を終えられるよう、漢字テストを実施している²。

また、4節において述べるが、入学後の文法能力の低下も問題となり、2020年度からは漢字テストに加え、文法テストも追加した。

3. 『J-CAT』について

J-CAT (Japanese Computerized Adaptive Test) はインターネットを通じて、コンピュータを使い、日本語能力（熟達度）を測るテストである。聴解、語彙、文法、読解の4セクションからなり、四肢択一の問題形式で、各セクション100点満点、計400点満点である³。（今井2012：005）

恵泉女学園大学では、2017年度の入学者より『J-CAT』をプレースメントテストとして使用し始めた。その理由としては、①自作のものであると毎年作成する手間がかかり、また、毎年作成すると他の年の入学者との能力比較が難しいこと、②6カ月ごとに受験が可能のため⁴、学期ごとに受験をしてもらうと日本語の授業以外の日本語能力⁵の測定が可能になること、③受験料が無料⁶で、試験結果は数日後データで送られてきて管理も簡素なこと、以上の3点から、2017年度より導入した。

『J-CAT』はJLPTのように、あらかじめ受験する級を決めておかず、自動的に受験者の日本語能力により異なったテストにするアダプティングテストである。そのため、全留学生の日本語能力を客観的に比較することができる。また、JLPTのレベル相関もされているため、JLPTを持っていない学生の能力もおおよそ把握できる。

入学後の留学生の日本語能力を客観的に示すことは、通常の日本語の授業だけでは難しいことが多い。なぜなら、成績評価には「授業への参加度・授業態度」が含まれており、どうしても授業態度の真面目である学生が上位になることが多く、日本語能力と相関性がない場合も少なからず見られるためである。

なお、広谷（2017）では、スピーキングテストが含まれていないことから、「プレースメントテストとしてこれらの熟達度試験を使用することは、はたして妥当と言えるのか、学習者の言語によって妥当である場合と、そうでない場合があるのか」という課題が出てきた。」とあるが、恵泉女学園大学の場合、スピーキングテストはインタビューテストとして入学時に実施しており、プレースメントテストとして使用するのには問題ないと考える。また、今井（2012：005）にあるように「時間をおいて（6カ月以上を推奨）継続的に受験することにより、日本語能力の伸長を確認することもできます。」とあり、プレースメントテストとしての利用だけではなく、日本語能力の伸長を測るためにも有効である。

そこで、今回は主に「文字・語彙、聴解、文法、読解の4セクション」を中心に日本語能力の推移を考察し、課題などを考えていきたい。

4. 『J-CAT』の結果と考察

4.1 今回使用する現3年生、4年生の『J-CAT』のデータについて

現3年生は2019年4月に入学した学生達17名で、まず日本語の授業を受ける前にプレースメントテストとして、2019年3月に『J-CAT』を受けている（以下、図などの結果には1年春と記す）。その後、半期「日本語Ⅰ」の授業を履修し、授業最終日の7月に『J-CAT』の2回目を受験（以下、図などの結果には1年秋と記す）、そして、「日本語Ⅱ」の授業の最後の1月に『J-CAT』の3回目を受験（以下、図などの結果には2年春と記す）、合計3回の結果を考察する。

現4年生は2018年4月に入学した11名の学生で、2018年3月にプレースメントテストとして1回目の『J-CAT』を受験（以下、図などの結果には1年春と記す）、2018年4月から「日本語Ⅰ」を受講し、7月に2回目の『J-CAT』を受験（以下、図などの結果には1年秋と記す）、9月から「日本語Ⅱ」を受講後の2019年1月に3回目の『J-CAT』を受験（以下、図などの結果には2年春と記す）、そして、2020年4月からは「日本語Ⅲ」を受講し、2020年7月に4回目の『J-CAT』を受験（以下、図などの結果には2年秋と記す）したため、合計4回の結果を考察対象としている。

以下の表3は、受験回数、図への記載、受験した年月をまとめたものである。

表3 受験回数・受験年月のまとめ

受験回数	図の記載	現3年生	現4年生
1回目	1年春	2019年3月	2018年3月
2回目	1年秋	2019年7月	2018年7月
3回目	2年春	2020年1月	2019年1月
4回目	2年秋		2020年7月

4.2 平均点の推移

まずは平均点の伸びについて見る。図1は現3年生の3回の結果の平均点、図2は現4年生の合計4回の結果の平均点の図である。

図1を見ると、現3年生は1回目から3回目まで回を重ねるごとに伸びが見られた。この結果だけ見ると、大学に入り、順調に日本語能力が向上して

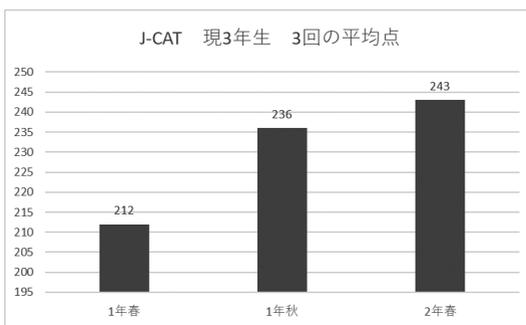


図1 現3年生 3回の平均点

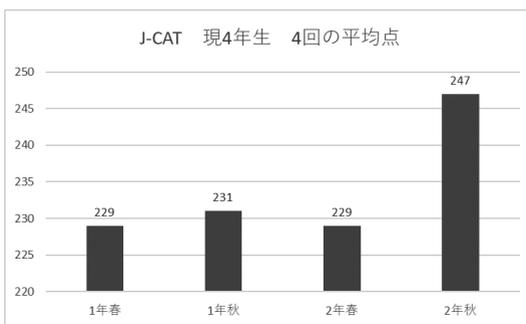


図2 現4年生 4回の平均点

いるように見える。

だが、現4年生については、2年次の春に一度下がり、1年春のときと同じ点数になってしまっていた。なぜ現4年生は「日本語Ⅰ」「日本語Ⅱ」を履修したあとの結果である2年次の春に点数を落としてしまったのだろうか。その結果を探るべく、1年秋と2年春の各項目の点数を比較し、点数が下がった項目を見てみる。

4.3 現4年生 下がった項目

図3は現4年生の「聴解」「語彙」「文法」「読解」の4項目と4項目の合計点（満点は400点）の5つについて、1年秋に受けた『J-CAT』の点数と2年春に受けた『J-CAT』の結果を比較し、点数が上がった人、下がった人、変化のなかった人、を図にしたものである。

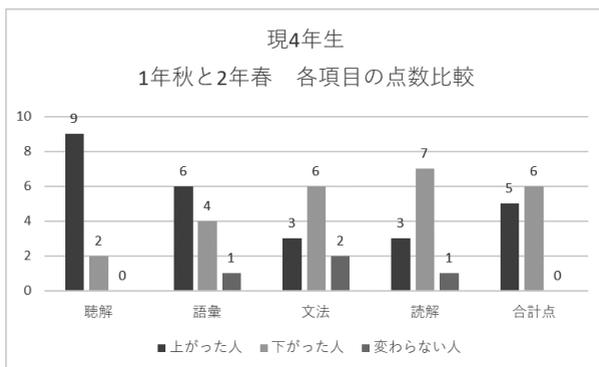


図3 現4年生 1年秋と2年春の各項目の点数比較

この結果をみると、「文法」は11名中6名、「読解」については11名中7名が点数を前回の試験のときより落としている。また、「語彙」についても11名中4名が点数を下げている、3分の1の学生が落としたことになる。つまり、「聴解」以外は入学後にあまり伸ばせていない可能性があり、総合的な日本語能力についての底上げの必要が考えられる。

そうは言っても、入学時の1年春と最後に受けた2年秋の結果だけを比較してみると（図4）、11名中9名の総合点は上がり、下がった学生は2名だけだった。以下の図4は現4年生の1年春と2年秋の合計点を比較し、合計

得点が上がったか、下がったか、それとも変わらなかったのか、ということを示す図である。

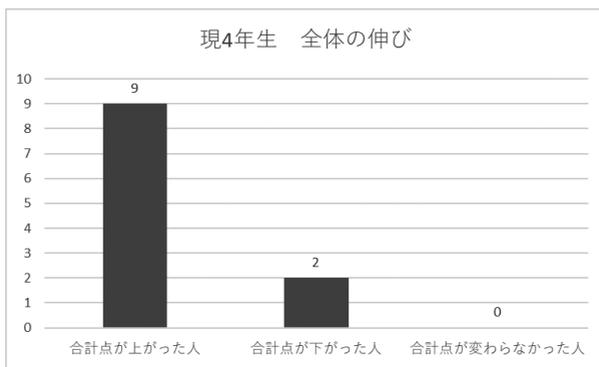


図4 現4年生 全体の伸び

1年次は春学期に「書く」「聞く」、秋学期に「話す」「読む」の能力について授業を受けている。そして、2年の春学期は「話す」「聞く」の能力について授業を受けている。「語彙」「文法」については、取り立ててその項目を扱う授業がないため、仕方がない結果なのかもしれない、今後はその点に留意すべきと考える。

とくに「文法」については、日本語学校時代⁷の大学受験前にはJLPTの合格のために猛勉強してくる学生が多いと思うが、大学に入ると取り立てて行わないため、忘れていく、または取りこぼした文法項目はそのまま習得できずにいる、ということだと考えられる。事実、本学の学生が入学後にJLPTのN1になかなか合格できず、どこが難しいかと聞くと、まず「文法」を挙げる学生が多い。そのため、2020年春より、漢字テストに加え、文法テストを実施することにした。

しかし、「読解」については授業で扱っているのにもかかわらず、それが伸びていないのは大変問題である。詳細の検討は今回できないが、授業のやり方・教材などについて検討したい。なお、「語彙」は「読解」とともに伸びることもあるため、「読解」の授業のやり方を変えることにより、「語彙」力についても変化する可能性が期待できる。

入学時と2年秋の結果を比較すると多くの学生が伸びていた。そこから、

2年次に伸びが見られなかったのは、一時的に語学の能力が伸び悩む停滞期であった可能性も考えられる。最終回の2年秋に伸びがみられたのは、大学の授業にも慣れ、日本人の友人もでき、バランスが取れてきたためではないだろうか。

4.4 現3年生 下がった項目

また、現3年生の平均点は毎回上がっていたが、個々の結果を見てみると、点数が下がっている学生もいた。そこで、1回目、2回目、3回目の試験の合計点の伸びを確認したところ、1回目、2回目、3回目と順調に合計点が上がった人が13名⁸中9名、反対に2回目は1回目よりも点数は上がっていたが、3回目は下がってしまった学生が13名中3名、2回目は1回目よりも点数が上がったが2回目と3回目の合計点が変わらなかった学生が1名いた(図5)。

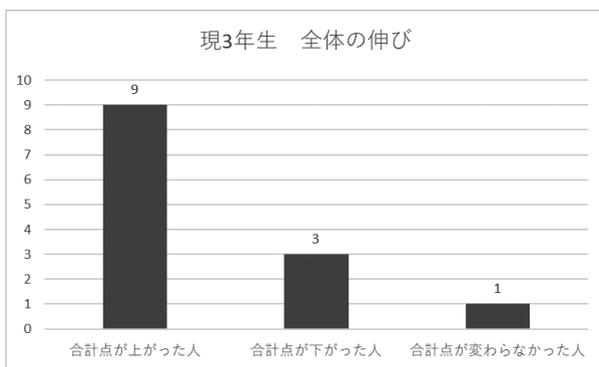


図5 現3年生 全体の伸び

つまり、1年経過した3回目の試験結果は1回目の入学時よりも点数は上がっているのだが、入学後の1年秋と2年春の半年を比較すると、点数が下がってしまった学生が3名いたことになり、これらの学生は入学後の日本語能力があまり伸びていない可能性がある。これは、現3年生にも見られた結果であり、大学生活にも慣れ、あまり勉強しなくなる中だるみと呼ばれるものの可能性もある。

そこで、点数が下がった学生はどの項目が下がったのかを見てみる(図6)。

下記の図6は、点数が下がっている学生3名の2回目（1年秋）と3回目（2年春）の試験結果について、点数が上がった人、点数が下がった人、点数が変わらなかった人を項目ごとに示したものである。

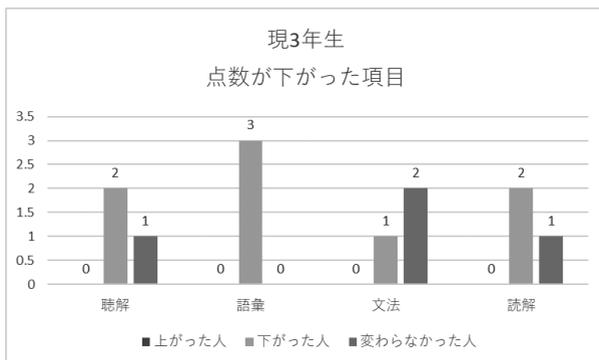


図6 現3年生 点数が下がった項目

その結果、「語彙」について点数が下がっている学生が一番多く、次いで、「聴解」と「読解」、「文法」という結果だった。このことから、「語彙」を増やせなかった学生が多い可能性があることがわかる。また、読解についても下がった学生がいることが気になる。4.3でも述べたことだが、語彙は読解の中でも相乗的に伸ばせる能力であると考え。そのため、もう少し読解の授業の比重を上げることや、効率的な語彙習得について考える必要があると言えよう。

4.5 現3年生 上がった項目

反対に1回目と3回目の合計点の伸びが一番大きかった学生上位5名について、どの項目が伸びているのかを見てみたい。5名の学生はそれぞれ、一番伸びた学生からA～Eと示し、図7に示す。なお、図にある数値は1回目の試験から何点上がったかという点数であり（例えば、Aの聴解が9というのは、聴解の3回目の試験が1回目よりも9点上がったことを示している）、「-（マイナス）」になっている学生は反対に3回目の試験が1回目よりも下がっていることを示している（Bは聴解が1回目の試験よりも3回目は8点低く、下がっている）。

なお、各学生の1回目と3回目の点数の伸びは、表4のとおりである（Aは3回目の試験結果の合計点が1回目の点数よりも67点上がったことを示している）。

表4 現3年生1回目と3回目の合計点の差

A	67点
B	65点
C	48点
D	38点
E	35点

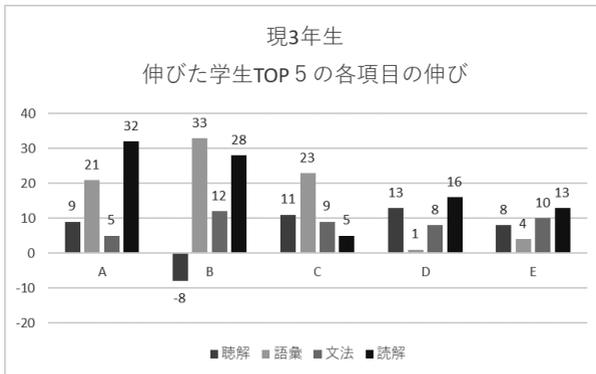


図7 現3年生 伸びた学生TOP5の各項目の伸び

A～E共通して伸びているのが「語彙」「文法」「読解」である。しかし、「語彙」については、D、Eは大きな伸びではない。また、「文法」についてもそこまで大きな伸びではない。

特に伸びたA、Bについてしてみると「語彙」と「読解」の伸びが著しい。前述したように、「語彙」は「読解」の中でも相乗的に伸ばせる能力であることの証左ともいえるかもしれない。

では、現4年生はどうだろうか。

4.6 現4年生 上がった項目

現4年生についても、4.5の現3年生同様、1回目と4回目の伸びが大きかった学生について見てみる。表5は現4年生の中で1回目と4回目の伸

びの大きかった学生上位5名について、F～Jとし、1回目と4回目の合計点差を示したものである。

表5 現4年生1回目と4回目の合計点の差

F	42点
G	40点
H	34点
I	34点
J	31点

現3年生と比較すると、入学時との伸びの点数差は少なくなっている。各回の平均点(図1、2)を見ると、入学時の点数差は3年生が212点、4年生が219点と10点程度あり、現3年生のほうが少々低い。最初の点数が低ければ、点数が上がりやすいということはあるが、現4年生は少し伸びが少なかったと言えよう。

次に、伸びた学生の上位5名の各項目の伸びを見てみる。図8は、図7同様、1回目の点数と4回目の点数の差を比較し、その点数差を図にしたものである。

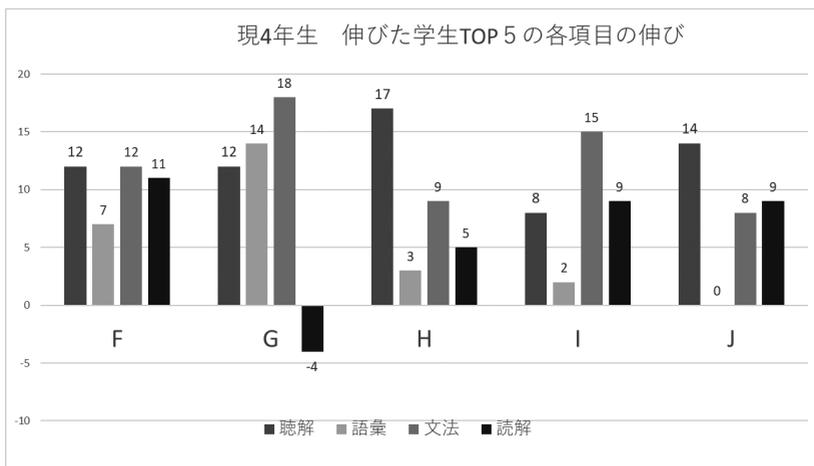


図8 現4年生 伸びた学生 TOP5の各項目の伸び

「文法」についても現3年生同様、全員伸びている。「文法」についてはそ

れをターゲットにしての授業を設けてはいないが、最終的には総合的に伸ばすことができる可能性が図7とこの図8結果から見えてくる。

また、「聴解」についてもどの学生も伸びている。これは、現3年生と異なるところである。その理由として、約2年間大学生活をし、聴解能力が鍛えられたことも大きいと思うが、2年春には「話す」「聞く」についての授業をしているため、伸びた可能性も考えられる。

そして、現3年生同様「語彙」と「読解」については伸び悩んでいる可能性が見られ、授業の見直しが必要だと考えられる。

4.7 1回目と最後のテスト 各項目の比較

最後に、入学時の1回目と3回目（現4年生は入学時の1回目と4回目）の試験結果の各項目の点数の伸びも見てみたい。図9は、3年生17名の学生の各項目の点数の伸びで、図10は、現4年生11名の学生の各項目の点数の伸びである。

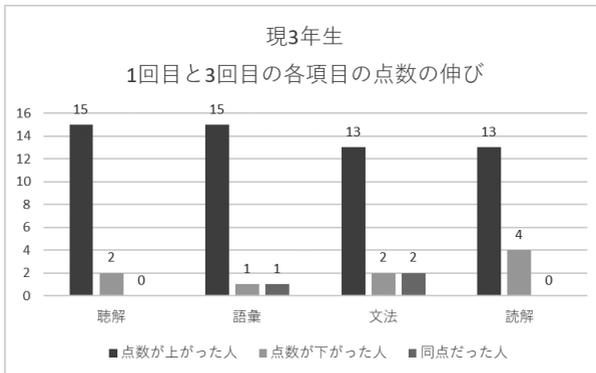


図9 現3年生 1回目と3回目の各項目の点数の伸び

図9の現3年生の結果を見ると、「聴解」「語彙」は多くの人々が点数を伸ばしているが、「読解」については点数が下がった学生が4名と多く、前の結果同様、「読解」の点数が下がっているのが目立つ。また、「文法」についても、17名中13名は伸びているのだが、2名は下がり、2名は同じ点数という結果だった。

以上、全体の傾向からも言えるが、入学後から大学で日本語を学び、少し

ずつは日本語能力が伸びていることは確認できたが、2回目と3回目を比較すると下がっている学生もおり、伸び悩んでいる可能性、そして、中だるみの可能性も見えてきた。また、「読解」、「語彙」について、日本語能力が伸ばせていない可能性も判明し、これらをもとにシラバスの見直しを考えていきたい。

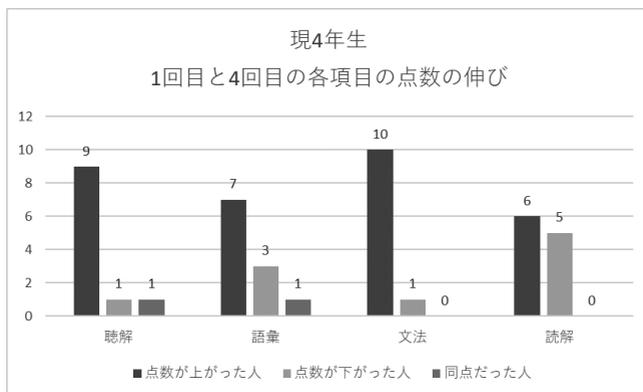


図10 現4年生 1回目と4回目の各項目の点数の伸び

図10の現4年生の結果を見てみると、現3年生同様に「聴解」は11名中9名「文法」は11名中10名と点数が上がった学生が多かった。

しかし、「読解」については11名中6名しか点数が伸びた学生がおらず、5名は下がっており、約半数の学生が伸びなかったことになる。これについては、早急に授業を見直す必要がある。

4.8 まとめ

今回の結果から2年次は主に「発表」と「就職」ということを視野に入れて授業展開をしているが、もう少し「読解」「語彙」についても考えていく必要があることがわかった。特に「読解」については、授業内容・使用教材ともに早急に見直しが必要である。感覚として「文法」ができないから読めないのではないかと思っていたのだが、今回の調査結果を見て、「読解」の授業のありかたに問題があるのではないのだろうかと実感した。

しかし、授業は時間が限られており、15回～30回という回数しかない。そのため、自律的学習と結び付けて通常授業とのつながりのもとにシラバスを

設計していく必要があるだろう。

5. 今後の課題

今後は、より詳細なデータを得るために、各学生へのインタビューの実施の必要性がある。また、今回は現在の2学年のみのデータだったが、継続的な調査さらには他学年にも継続的に調査する必要がある。そして、「話す」能力の授業を多く取り入れているのだが、それについての調査も必要である。

近年、恵泉女学園大学には徐々に留学生が増えてきているのだが、その分、日本語能力についてご意見をいただくことも増えてきた。そのことも踏まえ、今後も留学生の日本語能力がどのように伸びていくのか、または伸びていないのかを客観的に示し、全体のシラバスを考えていくことが重要だと考える。今回はその重要性が示せたことは大きかったと言えよう。

なお、日本語教師が授業で関われるのは2年次までであり、その後の日本語能力については把握できないことも多い。やはり留学生を受け入れていくためには、入り口から出口までの継続的な日本語の支援も必要であると感じる。これについても、今後の課題としたい。

【参考文献】

- 今井新悟 (2012) 『J-CAT オフィシャルガイドコンピューターによる自動採点日本語テスト』 ココ出版
- 今井新悟 『日本語教育通信 日本語・日本語教育を研究する 第39回』 「J-CAT (Japanese Computerized Adaptive Test)」 <https://www.jpfe.go.jp/j/project/japanese/teach/tsushin/research/201111.html> (2021.10.3検索)
- 広谷真紀他 (2017) 「プレースメントテストとしての J-CAT と SPOT の妥当性の検証：中国語を母語とする中級学習者のデータを用いて」 Rose Hulman Institute of Technology 21 publication 47 citations

【注】

- 1 うち1名は留年生のため、今回の3年生の結果は17名のデータを対象とする。
- 2 漢字については、残念ながら時間の都合で授業内に一斉に漢字の勉強をする時間は設けられておらず、教科書を購入して自習をしてきてもらい、試験のみを授業で実施している。

- 3 2020年4月より「一般社団法人日本語教育支援協会」が運営しており、今回示したデータは筑波大学日本語・日本事情遠隔教育拠点による運営の際のものである。
- 4 6カ月以内に受験すると正確な能力が測れない。
- 5 大学の成績評価には「授業への参加度・授業態度」なども勘案されて成績が出されるため、純粋な日本語力の測定は難しいと考える。
- 6 現在は有料
- 7 今回の対象者は全員日本語学校出身者である。
- 8 4名の学生が1年秋の試験を受けておらず、結果を反映できなかったため、「17名中」ではなく、「13名中」となっている。